

目次

(1) はじめに	1
(2) 江戸時代のキリシタンと被差別民	4
・キリシタン時代の長崎と浦上	4
・被差別部落の移転と「崩れ」	6
(3) 浦上四番崩れとキリシタン・被差別部落	8
・浦上四番崩れと被差別部落	8
・二つの解放令―「高札」の撤去と身分解放令	11
(4) 原爆は浦上に落された	14
・原爆は「神の摂理」か？	14
・ふるさとは一瞬に消えた？	16
(5) おわりに	17

(1) はじめに

長崎市民の多くは、長崎港に注ぐ川に沿う北部の地域を浦上と呼ぶ。浦上天主堂、浦上駅、そしてその浦上川とこの地名を冠するものはこの三つぐらいだ。それでも、港町長崎とは違う長崎の一地域を指す言葉として、浦上という響きは確かに意味をもっている。浦の上であるから、海辺の高い所と解してよいだろう。平地の少なかつた長崎は、江戸時代から干拓が進められ、今日に至っている。出島や新地も明治になって埋め立てられた。港口から浦上川を二キロほど上ると浜口という地名があるから、この辺りまで埋立地であることがわかる。浦上という地名は、鎌倉時代から見え、一五八四年（天正一二）には領主の有馬晴信がイエズス会に譲渡したことも知られている。一五八七年（天正一五）秀吉が伴天連追放令を發布し、同じく寄進されていた長崎とともに浦上はイエズス会から没収され、秀吉の直轄地となった。江戸時代浦上のうち幕府領は、おおむね浦上川をはさんで、浦上山里村と浦上淵村に分かれていた。このうち、淵村という地名は、明治期になくなり、浦上山里村は、一九二〇年（大正九）当地が長崎市に編入したことに伴い、消滅した。したがって、浦上という地名は、行政区をあらわすものではなく、通称名といったほうが正確であろう。であるから、浦上といったとき、人それぞれ思い浮かべる範囲は必ずしも同じではない。

一九四五年（昭和二〇）八月九日、浦上はアメリカの核攻撃（原爆投下）を受けた。長崎原爆資料